
ワームホールっていきなり言われても……

ストラップ・大守 瑛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワームホールっていきなり言われても……

【Nコード】

N1418Z

【作者名】

ストラップ・大守 瑛

【あらすじ】

オリジナル小説の処女作を多少変えてものです。

ワームホールを使ってっ敵をブツ飛ばす！

そんなことをやる、ラノベです。

登校ってこんなもんだろっ……はあー（前書き）

至らぬ点が多々ある小説ですが最後まで付き合ってください！
一様10部で構成しようかと思っております！

登校ってこんなもんだろう……はあー

プロローグ・話とは唐突なものである。

今から三ヶ月前、日本のある大学の実験室が実験中吹き飛びスタツフ三人が消えた。

そんなことは、今はどうでもいいことで「ハアハア」と僕は自転車を漕いだ。

僕、^{やまがみはやあ}山上早雄は今、とても憂鬱気味だ。

こんなないい天気でも、この長い距離を毎日、自転車を漕いで登下校しないといけないなんて……そんな気持ちを察してか、昨日辺り開花するはずの桜が、まだ咲かないで、赤いつぼみのまま。

まっ、そんな事でへこたれてはいけない、せつかくの進学校何だから。

自転車をさらに力強く漕ぎ進めた。

隣には、中学のころ同じ空手部の高空^{こうくうゆうた}勇太が同じく自転車をえっちらおっちら漕いでいる。

「はあ、はあ、なんでこんなに坂道が続くんだ、もういやになってきたぞ」

考えている事は同じだったようだ。

「確かに、こんな長い道ほぼ毎日だと考えるだけで嫌になるな。選ぶ高校間違えたかな」

僕が立ち漕ぎをしても尚も、顔の位置が高い高空に向かって言った。

畜生、何でこいつこんなに背が高いんだ。僕だって平均よりは背が高いのに。

「おいおい、山上、お前がここを選んだのは、進学率が高いからだ

ろう？ 自分の将来が見えないだの言っていたのは何処のどいつだ」
「将来が見えない。確かに僕が言ったこと、なんだけどさ……でもこの坂は」

「なんかの役に立つだろう」

僕の言葉を無理やり遮り、さらに続ける。

「これからの未来、如何なるか分かったもんじゃないし、明日の未来のためにも筋トレだと思え」

「ええ、筋トレ……いやだ」

さらにブルーになったのが分かったのか、すかさず高空が言う

「すまん。中学の時のあれを思い出したか。あれはトレーニングの領域を超えているから。ただの扱きだから。前言撤回、この自転車漕ぎは、お前の将来への第一歩だ！」

「うるさい、叫ぶな！」

ここで顔色が逆転するが、フォローは入れない、いつもの事だから。

まっ、そんな感じの愚痴を言っていたら、学校が見えてきた。

しりつめいかんこうがっこう
私立佼明館高等学校、これがこれから三年間通う所だ。

明館は、地方の私立にしては高いレベルの学力で、東大や早稲田などには二桁の人が行っている。

部活も盛んで、運動部は皆、インターハイにあっさり行き、文化部は学校側が処理できないほどの賞を受賞する。かなりハイスベツクな学校である。

しかし、よくこんな学校に合格できたよな、俺やつぱり頑張ったな！

「なあ、高空、昨日の新聞部の記事見たか？」

「ああ、あれには驚いた」

「この学校、まともな所だと思って入ったのに、進学率がいいのに」

「あの、生徒会スキャンダル記事には驚いた、まさか会長が」

「そっち、たしかにあったけど、そっちじゃないって」

僕が半ば強引に言葉を切る

「え、じゃあ何？」

高空は首を傾げた。

そんな変なポーズのまま校門をくぐり、生徒数と比べるとあまり広いとは言えない、駐輪所にてると、

「ああ、分かった」

やっと、分かったか。そう、あのデカデカとした文字で書いてあった、あの記事、

「生徒会じゃなくて教師の浮き」

「それでもない！」

高空に、話半分だがまた全力で突っ込む。

こいつは、どこを見ているんだ、つい叫んでしまったではないか、よく聞け、一番上に書いて、でかいタイトルで『七不思議が 十七不思議に』と、あつやつ忘れたか」

「あつあれか、俺さ先輩に昨日聞きに行った。マジで、ほとんどが春休み中に起きた実話だつて」

「ホントに。その中に巨大な動物がうろついているとか、いきなり少女が見えない穴に入って行くように消えたとか、怪談じゃないものまであつたけどそれも」

「実は昨日、先輩に聞きに行った時に。先輩の友達がマジで、人が消えるのを見た、と言っていたんだ」

「見間違いないじゃないの？」

それが本当だったら怖い。ましてや、生死の境をさ迷う羽目になる様な青春、そんなことはないよな。

「それが、運動部が練習しているさなか、グランドの真ん中に忽然と現われて、そしてさっき言っていたように、見えない穴に入っていくように消えたつて。すんごい話だ」

僕はこの時、外の部活は入らないことを心の中で固く決心した。

うん、絶対だ。

「なんか、進学校というだけで選んでしまったことに後悔したよ。将来がどうこうの、話ではなくなつたな」

「でも、ほとんどが放課後の時間帯に出ているから、運動部に入らなければ大丈夫だ」

そんなものかな？

そんな話をしていたら、あっという間に下駄箱、廊下ときて「一の五」のプラカードがぶら下がった教室に付いた。

「僕のクラスここだから」

「あっそうだ。昼休み弓道部に入った先輩に、詳しく聞いてみないか？」

「いいね。じゃあまたな、高空」

「またな」

高空は軽快に去っていき、僕はクラスのドアを小気味よい音を立てながら開けはいった。

さあこれから三年間頑張りますか！

でも、まだこの時は生死をかけた戦いをするとは思ってもしなかった。

登校ってこんなもんだろっ……はあー（後書き）

最後まで読んでくださいありがとうございます！
では続きをどうぞ！

今度は女の子が出てきます！

登校初日ってこんなのだっけ？（前書き）

女の子が登場！

でもこんなのありかいな！

的な展開です。

登校初日ってこんなのだっけ？

第一章、学校はこんなもんだ。

そのあと教室に入った俺は、初めは緊張して声をかけなかったが、次第に周りにいる男子に声をかけていた。

高校生になるとメアド交換という名義で友達作るようになっていた、と言うより今の自分がそんな感じだ。

そんなことをしていると、キンコンカンコンとショートホームが始まるチャイムが鳴ると同時に、担任の先生が入って来た。結構若い女の先生。

「それでは自分の席についてください」

全員が席に着くのを確認し、

「連絡は特にないから早速だけど、自己紹介してもらいます」

なぜか高らかに宣言していた。

しかし早速すぎる。いくらなんでも、二日目で連絡がないなんてことはないだろ。六時間目に集会みたいのがあるとか、昨日言っていなかったか？

そんな疑問がクラス中から聞こえてきそうだが、先生はその空気を無視して、自己紹介の話を続ける。

「自己紹介は名前と好物を言うように。そのほか、出身校など言ってください。では、1番の人から……、だとうまらないので、最後四十番の人からお願いします」

普通に一番の人からでいいと思うけど、ましてや高校に来ての、初めての自己紹介なのに。ちょっとおかしい。

やっぱり俺の後ろの人も同じ考えだったらしく、持っていた本バ

サと置き、ポニーテールの女子が慌てて立ち上がった。

「あ、あた、あたしは」

かみかみ、いきなりだから仕方がないか。

ポニーテールの女子は、落ち着きを取り戻すように一回息を吸い吐く、

「あたしは横岑雪見^{よこみねゆきみ}、八中出身よ。好物はポッキー、みんなよろしく」

すつ、と座る、みんながこっちを向いたまま、なんだか分からない無言。座ったまま、

「あ、次自分だな」

と言い赤面、僕も慌てて立ち上がり、

「僕は山上早雄^{やまかみはやお}です。好きなものは、チョコ系の甘い物です。皆さんよろしくお願いします」

もちろん、かちかちだ。どんな印象を受けたかは分からないが、最悪の自己紹介だな……。

僕は、周囲のいたい目線を、浴びながら座った。その時、僕の肩にとんとん、と後ろから硬いものに叩かれ。

「あの先生、面白しろいね」

振り返るとポニーテールの女子のニコニコ顔があった。

「ただのへそ曲がりの先生だよ」

「早クン、すごいナイーブだね」

初対面でなんかひどくない？ このポニーテールの女子は思ったことが口に出してしまうのか、まず否定はしておこう。

「僕はナイーブでないけど。ただ連絡とか何にもないなんて、無茶苦茶だなと思ったから。それより早クンとは、僕の事？」

「そうだよ。だめだった？」

「分かったから、そんな顔しないで。」

今にも泣きそうな顔だった。ポニーテールの女子は起伏も激しいらしい。

「そうだ、自己紹介聞かなくていいの？」

「今から、かなっこの自己紹介か、どんなことを言うか聞いてやらないと」

「友達？」

「そうだよ」

その子を見様と前を向くと、僕は右掌を掻いていることに気が付く。

またかこの癖を治したいな。

「出雲かなえ（いずもかなえ）です。八中出身で好物は雪ちゃんと違って、トッポです。あつ、雪ちゃんと言うのは、雪見ちゃんのニッケームです。私のことは、かなえちゃんと呼んでくださいです」
背は低く、ショートカットの少女がずっと座った。

「人形みたいでかわいいでしょ」

確かにリアルな人形。でも、自己紹介の中には余計なところがあったような、気のせいか？というか、何時の間（いつ）にそんなに自己紹介進んだ？

「昔は、あんなん、じゃなかったのに」

ぼそりと、呟く。

普通に気になる事だが、聞いても言いのか。

「横岑さん、む」

彼女の人差し指が、僕の唇にあてられ言葉が遮られた。

いきなりだった、僕の顔が、自分で真っ赤になったのが分かるくらい熱くなる。

辺りを見るがみんなは、自己紹介を聞いているのか誰も気が付いてない。よかった。

「よ、横岑さん。何ですか急に」

「雪見と呼んでいいよ、あと人の過去は勝手に詮索しない、それが本人に直接聞くこと。お父さんにもよく言われたな」

さっきまで笑顔が遠い目になっていた。やはり感情の起伏が激しい

人。

「すみません、ただ気になっただけで」

僕はすうと頭を下げた。確かに彼女の言い分も正しい。

「ごめん、あたしも結構身勝手なこと言っただよ。いかにも、聞いてくださいみたいな、そんな言い方だったし」

「いいえ、機会があつたら、僕が本人に直接聞くようにする。」

雪見は笑顔に戻る。ちょうど、一番の人が自己紹介を終え着席した。

「それでは皆さん全員自己紹介終わりましたね、では」

その後担任の長い話を聞いて一時間目の授業が終わった。

で二時間目は校舎案内だそう。

この学校は、北からグラウンド、次に体育館などがある体育棟、次がクラスルーム棟、最後に特別棟である。

今僕らはクラス棟の一年五組の前である。

「早クン、なんだかわくわくするね」

僕の隣に左隣り並ぶ雪見が声をかけてきた。

「そうだね」

一様肯定しておく。

担任を先頭に出席番号順に二列に並んでいるため前二人は女子で、話しかけてくれるのは雪見だけだ。

僕らを並ばせると担任はすぐに説明してきた。

「まず、ここがクラス棟、教室のほかに多目的教室が六つぐらいあります。次は体育棟に行きます」

なぜか、すごい高いテンションで先生は説明をする。

「早クン、やっぱり広いよね」

「ドーム四つ分の広さがあるから、雪見さん」

雪見がぶくと、頬を膨らます。

かわいいが、たぶん怒っているだろう。

「雪見、と呼び捨てでいいよ。後、その変に丁寧語使わなくともい

いよ。どうせ同級生なんだし」

「うん、分かった」

雪見は、頬を元の形に戻し、にっこり笑う

そして律儀に二列にままだ移動し、僕らは体育棟の体育館前についた。

「この二階には体育館があります。一階は武道館があります」

担任はさつきと打って変わって淡々と説明をする。

「雪見は何か体育系の部活に入るの？」

「いや別に入らないよ。でも、何で早クンは、あたしが体育系の部活に入ると思ったの？」

「さつきから、きよろきよろしていたから」

「そうだった？　ところで、早クンは何の部活に入るつもりなの？」

「たぶん、空手部に入ると思う」

「へー、中学では空手部だったの？　あんまり聞かないけど」

「そうだよ。一樣……東北大会に出て、優勝したけど……」

「おお、強いんだね」

パチパチと、拍手してくれているが、そんなに凄い事ではない。

「いや……運が良かっただけ」

「何で？　優勝したんだから凄いよ」

凄い凄いと言われ、ダウンナーになる、僕……

「僕以外の選手が、全員棄権して優勝という悲しい落ちが、はあー、あんなのない普通。あそこまでの鍛錬の日々は何処へ、カムバック中学の青春」

「なんか、つまらない大会だったでしょ」

「そうだね。自分の力も試したかったのに」

泣きたい……今すぐに泣きたい。

そんなことを話していたら、クラス棟を通り抜けている。と、

「早クンは、何時も右手を掻いてるよね」

雪見が話しかけてきた。またか

「治したい癖なんだけど、なかなか治らないから困ってて」

僕は右手を掻くのを、止め赤くなつた手を雪見に見せる。

苦笑いだけで他のリアクションは無いまま、何時の間にか特別棟の一階に来た。

「特別棟の一階は皆さんが知っている通り、昇降口と購買部があります。そのほかにも」

「購買部は開いてないね、早クン」

雪見は先生の話の聞かずに僕に話しかける。

ほかの生徒は、真面目に先生の話の聞てる、さすが学力が高い学校は違う。

「そうだね、どんな物を売っているのかな」

シャッターが下りた購買部を見ながら言う僕。

「シャーペンとかノートかな」

「文房具！ 普通、パンとか、おにぎりとか、食べ物じゃないの！」

「いやあたしの中学校に購買部があつてね、そこでは文房具しか、売っていなかったよ」

「へー僕は購買部があつたのは高校から、だから何が置いてあるのか、知らないんだ」

後で、どんな物が売っているか確かめよう。そして先生の説明が終わり、僕らは二階に上がる。

「この階には職員室やパソコン室、理科室などあります。次は三階に行きます」

なんだか、色々な教室がある階なのに、説明が終わると、直ぐに三階に上がった。

「三階は文芸部の部室と視聴覚室です。文芸部以外はめつたに来ません」

その、滅多にこない三階を、隅々まで先生は案内をした。ここよりも二階を説明しろよ！

と心の中に突っ込みを入れてみると、僕はついに、ある部のプラカードを見つけた。

「あつ 科学部だ」

「どうしたの、早クン」

「この学校にある、十七不思議知ってる？」

「うん、まあ」

なぜか雪見は顔逸らし、答えた。

「誰もいない筈の、科学部から声が聞こえるという、一七不思議の一つ目にあつてさ、それで気になって」

「ああ、そんなのも、有ったよね」

今度は、目を泳がしていた

「ここで何かあつたの？」

「いや別に」

僕は、それ以上詮索するのを止めた。

何か有ったぽいが、しかし言いたくない事なんだろう。

先生は、科学部から少し行った所の大きな扉の前で止まり。

「ここは、幽霊が出る視聴覚室です」

と一七不思議の一つであるお化けが出る視聴覚室を話して、チャイムが鳴ったので教室に戻った。

科学部前での雪見の反応は、なんだっただろう？怖いものが嫌いとか、でも視聴覚室のお化けの話の時は普通だったのになんだろう？

登校初日ってこんなのだっけ？（後書き）

まだ続きます。

事件も何も発生してないけど、伏線ばっかですね。
では、次をどうぞ、何か変なのに巻き込まれます。

腹が減っては戦はできぬ、みたいな？（前書き）

ついに問題発生！

早雄が高空との約束で昼休み弓道場に行くところには……

ヒロインズが、がんばって彼を助けます！

そんなお話です。

腹が減っては戦はできぬ、みたいな？

昼休み。

クラス男子と食う約束があつたのに、雪見に無理矢理購買部に連れて行かれた。

しかも弁当も一緒に食べようと言出した。

僕に気があるとか。まさかただ前に座っていたからだよな。何考えているんだ！ でも、もしそうなら僕からもアプローチをかけたところだな。しかし高空との約束があるのでそんな時間はない。

それは、三時間目と四時間目の間に昼休み弓道場で、先輩と落合う様になった、という事なので、高空に弓道場に飯を食ったらすぐに、来る様に言われている為である。

そして今は

「かなつこ、これもいいね、あれもいいんじゃない」

「雪ちゃん、数を決めてから選んだ方がいいです」

雪見と何時の間にかいる、出雲かなえちゃんが購買の中をぐるりと覗いている。

後ろには、長蛇の列。

かなり人気なんだ。あ、また右手の掌を……本当に直したいこの癖、赤くなって、いるのに止めない自分が情けない。

「だって、早クンが買ってくれるって、言うからさ」

「いや、僕は一つだけならいい、と言った」

僕なりのちよつとした、アプローチのつもりだが、ただの財布らしい……。

「そうだっけ？ だったら、あたしはこれ」

雪見が取り出したのは、赤い四角い箱。

「ポッキー！ というか、お菓子もあるの」

僕の前に、彼女ら二人が購買の中に身を乗り出して見ているので、

僕は全くと言っていいぐらい中が見えない。

見えるのは、壁と購買に居るおばちゃんだけ

「早雄くん、私も買ってもらっていいですか」

きらきらした目が、こつちを見つめていたので、僕は財布の中身を確認して、

「一個ぐらいなら」

「ではこれです」

「何これ、もしかして中華まん！」

「あんまんです。だめです？」

「いいよ。ただ何であんまんが、あるのかなって、思ったただけから。しかも、ほくほくの暖かそうなやつ」

改めて言うが、僕は購買の商品は全く見えない。

また別の機会に確かめよう。ただ、この品揃えは何。まさにコン
ビニだな。

「二百五十円です」

購買のおばちゃんの声が聞こえ、二百五十円を出した。

「早くンは買わなくてよかったの？」

「特に買おうとは、思ってたから」

購買を離れたら急には雪見が立ち止まる。

「あつ、弁当ここで食べよう」

雪見が長椅子を指さし、満面な笑顔で言う。

ちよつとかわいいと思ったのは、ここだけの秘密とし僕らは長椅子に座ったのだが……。

「で、何でぼくが真ん中」

「別にいやです？ 両手に花です」

出雲ちゃんが、じと目をして言った。

「ま……、そうだけど……」

まさにこの世の春みたいだ！ というのを察したのだろうか……。
気を付けなくっては。

僕はそれを誤魔化す様に弁当を広げる。さすがに食べる時まで、

右手は搔かない。

「……いただきます」「」

そして、自分の弁当を食べようとしたら、

「早クンこれ、アーン」

「へ！」

右にいる雪見が、卵焼きを箸でつかみ、僕に差し出してきた。

「食べてみて」

「ああ、分かったけど……い、今のアーンで」

「いいじゃん、はいアーン」

僕は少し躊躇ったが、ゆっくりと口を開けた。周りの視線が痛い、
「うまい！」

しかし、こんな周りの視線はすぐに気になくなるぐらいの素晴らしい味が口いっぱいに広がる。

卵焼きでここまで感動したのは、初めてだった。

「今日はうまくできた。よかった」

ドジっ子でなくってよかった。たぶんラノベとかだどこかで辛かったりとかする見たいなことがある。

「早雄くん、こっちもアーンです」

また目の前に卵焼き。今度は左から

「出雲ちゃんも」

「出雲ちゃんじゃなく、かなえちゃんと呼んでくださいです。」

「はい、はい」

「じゃあ、はいアーンです」

今度は躊躇いの無く、ぱく、と食べて

「かなえちゃんのは、甘味の卵焼きだね。」

「おいしいですか」

「おいしいよ」んっ

へへ、と笑うかなえちゃんを見た後、時計を見るとだいぶ時間が過ぎていた

「どうしたです」

「やばい、時間が無いや」

「早クン、どうしたの」

「弓道場で、友達と会う約束しているんだ」

「なんで弓道場に？」

「弓道部に入った先輩が、一七不思議の一つを実際に見たから、その話を聞きに行く為」

「そう」

何故かまた雪見がそして、かなえちゃんも顔を逸らした。

なんでだろう？ それを考える暇も時間もなく、昼飯を口に放り込んだ。

「じゃあ、また教室で」

と二人にあいさつをして、僕は弓道場に向かった。

この学校は、弓道場へ体育間から入ることが可能である。

しかし、弓道場に屋根が付いているわけでもない、なので、小山の上にあるようなこの学校は、ヒューと風が吹くと寒がりな僕は、情けなく「寒」と声を上げてしまう。

そんななか、僕は高空を待っていると、急に視界が、テレビの砂嵐のようにザアアとちらつく、

目の使い過ぎか、最近ゲームばかりやっているからな

「ええええええええ、何だ、これは！ 妙に明るい？」

その何だ、これは、兎に角

「何かがおかしい……分かった！ 音がしない。」

さつきまで、風が凄かったのに、ぴたりと止んでいた。

よく見ると、足元の砂利が淡く光っていた。

それに何だあれ、白い人形？ そして空には

「バサッバサッ」

何あれ、何か飛んできた！

「鳥、いやでかいぞ」

そのほかでかい、真っ白い結晶のようなもので、できた鳥は、弓道場の的のある方の屋根に留まり、ピーピー泣いていると思ったら

「わっ、何で目の前に」

グアと大きな口を、開きこっちに向けてきてガブっと、

「て、何だよこれ！」

「ガッツ」

僕が逃げたため鳥の口は空気しかない。

「ハア、ハア、何だこの自分と同じ、いやもつとでかい鳥」

ギラギラと、した赤い目がこっちを睨んでいた。

「兎に角、体育館に」

ジャリジャリと、音を立てながら走った。怖い、怖い、

でかくても、鳥はあくまでも鳥のようなので、追いつかれず、何とか体育館に入り扉の鍵をガチャリと閉めた。

「これでよし」

「ガチン、ガチン」

「鉄の扉だから破られないよな。しかしなんだよ、この地面そしてあの鳥、しかも何で生徒がた誰一人いないの、おかしすぎる」

しかし、おかしい現象はまだ続く

「さっきまで外にいたよね、体育館の真ん中になんか居なかったよね、鳥さん」

言葉通り、さっきまで外にいたはずの鳥が、言葉通り、体育館の真ん中にいた。

いや違う、鳥はそこに現れた。まるで見えない穴から出てくるように。

鳥は瞬く間に僕の目の前に来る。

柔道や空手をやっているけど次元が違う。

もう死ぬんじゃないか。どうしようもないもう。

僕は、覚悟を決めて目をつぶった時。

「早クン、危ない」

女の人の声が、少し離れた所から聞こえた。

「雪実！ 何でここに」

「何でもだよ」

何故か、目の前から声がしたので頭を上げると、目の前には鳥ではなく、かなえちゃんと雪見がいる。

そして、鳥は今まで自分が居た扉の所に。レポート……まさか。かなっこ、さっ直ぐに終わすよ」

「おっけーです」

「早クンは、ここに居て」

と言い、雪見はスウーと右手を上げた。

かなえちゃんが見えない穴に入って行く様に消えると瞬間、かなえちゃんが思わぬ所に出てきた。

「どうやって、一瞬であのステージ上へ？ 雪見、あの距離じゃ、かなえちゃんが鳥に食われてしまうよ。逃げた方がいいじゃないの？」

「大丈夫だよ」

「へっ」

今まで目の前に居た筈の雪見が鳥の真前にそして、手の中には何時の間にか竹刀があつたが何所から出した

「やーあ」

雪見は竹刀を細やかに振り、如何にも硬そうな鳥の足を、いとも簡単に打ち抜いた。

パリパリン

ガラスが割れる音、と共に鳥の足が消えもがき苦しんでいる。強い「いいよ。かなっこ」

「おっけーです」

かなえちゃんが両手をぱつと手前に出すと、深く息を吸い。

「ギリシャ神話より射手座ケンタウルス族のケイローン三次元変換です」

地面の光は強くなり、夜空に見える射手座が現れた。

色が付き始め、

「雪見、デフォ化されたあれは本物？」

「ま、一様本物。かなっこ、あの鳥逃げるから早く」

何時の間にか、僕の目の前にいる、雪見が答える

「分かっていてるです。ケイちゃんシュートです」

ケンタウロスは飛び上がる途中の鳥に向かって、金色に近い光の矢を放った。

その矢は金色の光の粉を出しながら鳥を貫く。

「ピーーーーーー」

大きな穴が開いた鳥が、ドサツと落ち、鳥は白い光の粉になって消えて行く、

「空間が崩壊するです。雪ちゃん早くするです」

「分かった。じゃあ、早クンこっちに來て」

と自分は手を引かれて、かなえちゃんが待つ体育倉庫に入った。

「あと五秒四・三・二・一、次元間空間崩壊しました。」

バリバリと何所からともなく何かが碎ける音、同時に地面の淡い光も消えた。

「今のなんですか？ しかも次元間空間とか、あのばかでかい鳥はさっきまでそれなりに冷静だったけど、

「落ち着いてくださいです」

「落ち着くもなにも！」

「早雄くん」

「いやでも」

「早クン、あたし達も、ちゃんと説明しないといけない義務があるの、だから今直ぐにでも説明したいけど、今は時間がないから放課後、保健室に來て」

「雪ちゃん、大切なこと言い忘れてるです。早雄くん、このことは誰にも言は無い様にです。後とで正式にサインして貰うです。今は、これで約束です。」

かなえちゃんが小さな小指を出してきた

「分かった」

「指きり拳万、嘘付いたら針千本飲ます、指切った」

小さな手がそつと離れる。

僕は少し落ち着いた。

「予鈴は鳴ったし、それでは、早くン教室に戻りますか」
彼女たちの笑顔見て、僕たちは授業に間に合うギリギリで教室に入った。

ただ、高空との待ち合わせをすっぱかした事に気が付いたのはその後、勇太に会ってからだった。

この後、本気でこの学校に来たことを後悔するとは、誰も思っていなかっただろう。弓道場にこなればいや、彼女たちに会わなければ、この学校さえ選ばなければ、自分自身もそして誰も知らない、僕の体に眠る秘密には気が付かなかっただろう。

自分の右手のひらには生まれつき三日月の黒子が小さく有る。

腹が減っては戦はできぬ、みたいな？（後書き）

読み終わった方、ご苦勞様です！
では続きは、また後程

しかしこの作品に出てくる、早雄くんはラッキーボーイですよね。
女子にいきなり昼と一緒に食べるなんて……。
書いている作者がこんなこと言ってもいいのかわかりませんが、
早雄爆散しろ！

放課後説明会（前書き）

彼女たちの秘密がわかります

放課後説明会

午後の授業は、やはり六時間目は二、三年生との対面式。

「あの先生いい加減だよな。」

僕は、ぼそりと呟いた。

それは、五時間目の授業の終わった時の事。

授業終了のチャイムとともに先生はちゃっちゃと教室を出てどこかにいつてしまった。

クラスみんなが六時間目も教室だろうと、そんな空気になったので待っていると、

キンツコンツカンツコンー

「何だ？」

「1年5組、大至急体育館前に来なさい」

大きな声が聞え。そして、今にいたっている。

「君は、何時もずぼらで」

「すいません」

何故か校長先生に担任が怒られていた。しかもクラスの生徒の前で。

クラス全体ではもつと周りを見るようにと言われただけですんだ。その後、会が始まり校長先生の長い話を上の空で聞き、昼休みのことを考えていた。

その間も、右手の掌を掻いている。

放課後、勇太と帰るつもりだが、保健室に行く事になったので

「高空に言わないと」

と断り方を考え、高空のクラスに行くと丁度高空が教室から出て来た。

「早雄、お前なんで昼休み、弓道場に来なかったんだ」

あつ、完全に忘れていた。

「すまん先生に呼び出されて。その所為で」

大きな鳥に襲われたと言っても信じないだろし、ましてや他人に言うなと言われているのでここは嘘をつく。

「だったら、連絡しろよ、先輩も待っていたんだからな」

「すまん、今度から連絡する。それで話は聞けたの」

「ああ、それが弓道場にも出たんだって昨日、例の女子。5つあるうち真ん中の的あたりに出て来たんだって。で、ちょうどその的に矢を先輩が放って、その子に当たる直前その矢を握って止めて、その後ぱつと消えちゃったらしいけど」

「その女子どんな容姿だったの」

関係無いが、興味本意で聞いた。

「身長は女子の中では高いほうで、髪を一つに結っていたって。そんなに例の女子に興味があるのか。」

「いやそんなのではないけど」

これも嘘だな。

高空はニヤつき。

「ふーん、じゃあ帰るか」

「ふーんてっ、おい、そんなのじゃないって。」

「そうか？」

「あつ、それが、僕これから、学校に残らないといけないから先に帰っていて」

「待ってもいいぞ」

「でも、かなり時間がかかるらしいから」

僕が、どんな状態になって、戻って来るか分からないし。

「そうか、分かった。じゃあな」

「また明日」

高空の背中を見ながら、僕は保健室へ心の準備をしながら向かった。

ところでなんで保健室なの？ そんな事を思いながら、僕は保健

室のドアをトントンと叩いた。

「はい」

養護教師のあまい声が返ってきた。

ふと考えると、僕はこの学校に来てから初めて保健室に入るんだ、なんか妙に緊張してきたな。

「失礼します」

「どうしましたか、顔が赤いようですけど、熱が有るのですか」

「いいえ、熱ではなく、雪見さんにここに来る様に言われたんですが。」

「ああ、だと君が娘の言っていた、早雄君ね。ショートヘアーですこしかつこいい、確かにその通りだわ、雪見の眼は節穴では無いわ。」

「いや、僕全然かつこよくないですよ。」

「私の目から見ても、かつこいいわ。」

僕は逆上さかせているぐらい顔が真っ赤になった。

「ところで、要件はなにだったのか忘れてしまいました。なんでしたっけ」

わざとらしく聞く、

「白い結晶で出来た鳥と、あの空間についてここで説明すると、言われてきました。」

「白い結晶？ 鳥？ なんのこと？」

やってしまった。

もしかして雪見母はあの事を全く知らない、部外者なのか。

僕は、顔が一気に赤から真っ青になりふらつき始め、何時の間にか目の前が真っ暗になった。

「……もうお母さんだったら、何かしたでしょ」

「何にもして無いわ」

僕は上半身を起こした。

……騒がしいな。あれベット？

確かくらくらしできて、目の前が真っ暗になったから、ぶっ倒れたのか？

「お二人さん、早雄くんが起きたのです」

「あれ、かなえちゃん、何時来たの？」

「ついさっきです。」

「そうか」

また、まどろんできた。

「もう、何時^{いつ}まで寝ボスケさんでいるんです、早くこれ着てくださいです。」

「寝ボスケさんは、今にも寝そうな人には使わないな。この場合、何時^{いつ}まで寝ぼけているんですかだな」

完全に頭が回らない。

「じゃあ、言い直すです。何時まで寝ぼけているんです。早くこれ着てくださいです」

僕は服を受け取り、

「はい、それで、これを着て、てっえええええええ、何で僕、上半身裸なの！」

僕の絶叫で、雪美と雪見母がカーテンの向こうから入って来た。

「早雄君、貴方が倒れたの。直ぐにそのベットで寝かしたわ。そして、汗びっしょり掻いてそれで服を脱がせたわ」

「ど、どうもありがとうございます」

僕は受け取った制服を着た。なぜか、乾いている。

そんなに長い間寝てしまったか？

「じゃあ、早クンも服を着たし直ぐに説明したいんだけど、ここだと運動部とかの、怪我した生徒が来るからさ、移動するよ。」

僕はベットから降り、廊下に出ようとしたら、

「早クン、そつちじゃないよ。今は私たちしか居ないから、説明を兼ねてここから直接科学部の部室に行くね」

「へ？」

「それじゃあ早クンあたしの右手を握って」

雪見は右手を僕に差し出した。僕は彼女の手を取り、

「じゃあお母さんと、かなっこも行くよ。」

雪見母とかなえちゃん、雪見の左手を握って、

「よし、それでは出発」

地面が淡く光る。一瞬視界が歪む。飛んでいるとか、そんな感覚はしない

目の前は左側にある黒板に平行な長机とグラウンドが見える窓、右には理科で使うような器具が入った棚、そこはもう保健室ではなく三階科学部の部室だった。

「早クン、これがワームホールに依る、瞬間移動。面白いでしょう」

「え、待って理解が追いつかない」

おい待てよ、瞬間移動そんなことが現代科学で出来るのか？

「早雄君、そんな事を言わず座ってね」

雪見母は椅子を出してきて

「ああ、ありがとうございます。」

僕は長机の前に出た椅子に座った。

僕の左隣にはかなえちゃん、その奥の窓のそばに、雪見母が座る。雪見は黒板のそばに行き、

「まあ、そのまま鵜呑みにするのは難しいか。じゃあまず、あの鳥と空間について話すか。まず大学の実験室が実験中吹き飛びスタッフ三人が消えたニュースを覚えている？」

「うん、かなりテレビで取り上げられたから覚えている」

昨日まで、取り上げられていたニュースだからな。

「あれ、あたしのお父さんと、かなっこの両親がワームホールを作ろうとしたんだ。それで、ワームホール発生装置の起動実験中に、装置が爆発したのよ。あたしたちも立ち会い席で見ていたけど、擦

り傷で済んだだけ。事故の後、記録を見ていると磁場の影響が分らないけど、ワームホールの出口がここ、私立佼明館高等学校だったのよ」

雪見は黒板に学校と書き丸で囲んだ。

「まず、経緯は分かった。それで何で此処に、あんなのが出て来るの。もしかして、ワームホールの出口とかが関係するの？」

「鋭い、そうだよ。あたしと、かなつこがここに来たら、あの空間に入って、あれ見たいのが出て来てさ」

雪見は黒板にさらに空間、鳥、と書き足した。

「もちろん、あんなのは初めてで、こつちの世界に来てしまつて大変だったよ。確か、お母さんが思いっきり、殴って倒したんだよね。」

雪見母は恥ずかしそうに、もじもじして

「そ、そうだったわね」

「雪ちゃん、あの空間、あの鳥、ではだめです。早雄くんにちゃんと説明する約束をしたのです。」

かなえちゃんはふくれ面になっていた。

「分かつてる。あの空間と言っていたのは次元間空間と言います」

黒板に『空間』の後ろに『次元間空間』と付け足した。

「後あの鳥は、T H Sと呼んでいるの」

『鳥』の後ろに空間と同じく『T H S』と書き加え。

「でもT H Sは略語で正しくは他（T）次元、破壊（H）、生命体（S）。」

雪見はさつきみたいに、黒板に付け足しながら説明を続けた。

「本当は英語でThe others（他）dimension（次元）break（破壊）creature（生命体）、と言つて、T D B Cと呼ぶようにしたかったけど……」

雪見はかなえちゃんに目をやり

「かなつこが、言えなくつて、あまりにも可哀想だから他次元、破壊、生命体のアルファベット読みをした頭文字を取つて、T H Sに

したの」

「他次元、ということは、他の次元と繋がっているとか？」

「そう、早クンほんとうに鋭いね。ワームホールの出口がここになった所為で、ここに他の次元との間に穴が開いてしまったの。その所為で、T H S が出るようになったけど、代わりに私たちは、ワームホールを使える様になった。」

「ああそれで瞬間移動、分かった。」

「その結果として」

雪見が左の掌を僕の前に出した。

「かなつこも」

かなえちゃんみかづきがたは右の掌を出し僕は直ぐに気が付く

「二人とも僕と（・）逆の（・）向き（・）で、三日月型の黒子ほくろが在る」

僕以外の三人は、驚いた顔をした。

「早雄クン、今何と言いましたです」

「三日月の黒子があると」

「その前です」

「僕と（・）同じ（・）で（・）」

「早クン、黒子が在る手見せて」

「はい」

僕はさつきまで、左手で掻いていた右手を出した。三日月型の黒子がひっそりと在る。

「これ何時いつからあるんです」

「生まれたときから」

さらに、三人は驚愕する。

「あたしたちは次元間空間に入ったときに、出来ただけ。もしかしたらその黒子の所為で次元間空間に入ったのかも。だとまた次元間空間が出現時に進入するかもね。一樣、あたしとかなつこしか入れないはずなんだけど。」

だと僕は、卒業するまで、生死の狭間をさ迷う羽目になるのかな？

「もしかしたら早雄くんワームホールを使えるかもです」

「ところでワームホールとは、何？ 瞬間移動とかしていたけど」

「一言でワームホールと言っても、あたしとかなっこでも、違う能力になるよ。まずあたしから。あたしは、さっきやったように瞬間移動と」

雪見は左手を上げて

「早クン、後ろにある棚を見て。」

僕は体を右に捻り、ピーカーや三角フラスコなどが置いてあるガラス棚を見た。

「そこに三角フラスコが有るよね。それをこの右手に乗せます。ゆっくりやるね」

三角フラスコは見えない穴に入ってく、

「消えた！」

ガシャン

大きな音に体を戻すと雪見の右手に乗る筈の三角フラスコが地面に粉々になっていた。

「え！ なんで？ かなっこやお母さんは、あたしのワームホールに干渉できないし、早クン何かした。」

「いや何も、してないと思うたぶん」

「雪ちゃんの、物理移動ワームホールはどんな状況でも、正確に、確実に使えるのにおかしいです」

「物理的な制約とか無いの？」

「どんな物でも大丈夫です。もしかしたら早雄くんが『消えた』と言ったからだと思うです。たぶんそうです」

「それじゃあ早クン、あたしがワームホールを使うから、消えたとか、消えろとかと言って」

「分かった。」

「でも、棚にある物は落とすとダメな物だし、バックは保健室に置いてきたからあたしはケータイしか持っていないし、椅子とかだと、危ないから、ペンとかあるといいんだけど」

「あるわ」

雪見母はポケットからシャープペンシルを取り出し、

「よし、そのシャープペンを早クンの右手に出すよ、準備はいい？」

「いいよ」

「始めるよ」

さつきと同じ様にシャープペンが消え、

「消えろ」

同時に心で叫ぶ

今度は、僕と雪見母の間にいるかなえちゃんの頭上に落ちた。

こっん

「痛いですう。早雄くん何するんです。ぐすん」

涙目のかなえちゃんには萌えた。

雪見と雪見母はフワフワした顔になっている。

「実験中のちよつとした手違いで」

「ぐすん。もうかなえカンカンです。二次元、自作画、竹刀、三次元変換です」

ぼっん、と紙が出てきて竹刀が紙から落ちた。

「これでぼこぼこです。」

かなえちゃんが竹刀を振り回すのでとっさに右手を出した。
消えろ。

竹刀に触れた瞬間ポンと音がし、

「え、消えたです。ぐすん、うわあああん」

かなえちゃんは泣き始めた。ど、どうしよう。

「かなっこがああなると、手が付けられなくなるから。」

雪見母はそれを知ってか、知らずか、かなえちゃんを宥^{なだ}めていた。

「早クンは、ワームホールで出した物も無効にするんだ。やっぱり、三日月のマークが私と逆で、月が欠けていく向きをしているからかな。」

「確かに」

正確に言つと、僕の掌の月の黒子は月齢二七の向き、と言つても

分からない人のいるだろう。

簡単に言っと、さっきと言ったことの繰り返しになるが三日月と逆の向き。

まあ、あと三日で月は新月になります、という月。

「詳しく調べないとわからないから、まずかなっこのワームホールについて説明するね。かなっこは、さっきみたいに、他の次元にあるも物や動物を、三次元にするのがワームホールの能力」

「へー、だと絵やマンガから持って来たり出来るの？」

「そうだね。アニメや小説からも連れて来これるね」

「連れてこれる？ 人を？」

「あの伸びる人とか面白かったな。あと猫みたいなバスとか」

何となく色々な意味で予想がつくが、それを必要と、する敵って何者？

「あっそうだ。あたしたちチーム名が有ってね。それは」

雪見は大きく息を吸い。

「ワート」

「なんで、ワート」

速攻で突っ込む。

「もちろんのそれも説明するよ」

苦笑いをしながら、雪見は続ける。

「何故かと言うと、ワームホールとTHSの頭文字にしたかったんだけど、そのままだと『ワタ』になるからワームホールのワー、とた行で一番しっくりくるものでワートにしたの」

ぼくは心の中でワータ、ワーチ、ワーツ、ワート、ワート、と呟く。

やっぱりトかな。

「でも、何で敵の頭文字を入れたの？」

「あたしは、剣道と弓道やっていてね。日本の武道は相手にも感謝の気持ちを持って接するのが基本だから」

「分かる、僕も空手や柔道をやっていたから」

雪見母の慰め効果が、思っていた以上に早くかなえちゃんが泣きやみ。

「ベーだ、早雄君は私のサポート受けられないです」
あっかんべーの顔をしていた。

「そうだなっこ、もう一回竹刀を出して見て、早クンはそれを左手で握って」

「右手で触れたとき、消えるか確かめるため？」

「そうだよ。早クンにはワートに入ってもらっ積もりだから」

「へっ、でも」

「ああ、今日は返事いいから。」

よっかた。

「でもまた、次元間空間出会うことになるよ」

すっかり忘れていた。たぶん、すこし蒼い顔になっているだろう。

「まずは、早クンのワームホールがどんな時に発動するか確かめないと」

何時の間にか、かなえちゃんは竹刀を出していた。また振りかざしてきたので

「やーです」

今度は左手で止、

「痛ってー」

められず、

「さっきの天罰です」

にやりと笑った顔にぞつとしながら、珍しく赤くなった左手をフーした。

「か、な、え、ちゃん人を叩いちゃ駄目だわ。謝りなさい！」

さっきまでの、にやり顔がある意味、ぞつとするぐらい青ざめ、

「ごめんなさいです。」

「かなっこ、今度はちゃんと渡してよ」

青ざめたままの、かなえちゃんが竹刀を僕に渡した。

「かなえちゃんちよつと、こっちに來てほしいわ。雪見は早雄君の

ワームホールの能力を確かめていて」

かなえちゃんは、雪見母に呼ばれ窓側に行く。

かなえちゃんの顔は、何処まで青くなるのか解らないほど、青くなっていた。

おもしろい。

「早クン、今は左手で持つてるよね。じゃあそれを、右手以外の場所に当てて」

僕は言われたとおりした。

「右手以外、全部やったよ」

「ああ、あそこやってないよ」

「あそこって？」

雪見は頬を赤くして

「女の子に、言わすつもり」

「あ、……」

僕は雪見に背を向けあそこに竹刀を当てた。

「消えないから大丈夫」

「あ、分かった、ゴホン、じゃあ今度は右手に」

僕はゆつくりと右手で触れた。

「消えない！」

「何でかな。また消えろと言って」

「消えろ」

消えない

「消えろ、消えろ、消えろ」

それでも消えず。

「じゃあ心の中で念じるのは？」

消えろ、消えろ。今度はあっさり消えた。

「心の中で念じないと消えないね、左手だとどうなのかな。かなっこ、は無理そうだから」

ちらつと見たら、かなえちゃんは大きなブルーベリー見たいなになっっていた。

「まず早クンはT H Sに対して、最強の防御力を持っているよ。」

「なんで？T H Sに叩かれたら、お終いだよ」

「たしかにT H Sから、直接殴られたらだめだけど、T H Sは、あたしとかなっこのワームホールを同時に使えるから、T H Sもかなっこみたいに、他の次元から色んなものを持つてくるのよ」

自慢げに言う雪見、だけどふと疑問に思ふ事が出てくる。

「でも、実在するものは消せないんじゃない？」

「次元間空間は3・5次元みたいな、別の次元だから消せるよ」

「へー」

「ほかに、T H Sは魚や虫とかの生きものだったり、戦闘機や戦車だったりするの」

「だと兵器系のT H Sは、こっちの次元から弾を持つてくるとな」

「そう。鋭いね、でも四次元から持つてくる時も有るけどね」

「四次元！」

また知らぬ間に右手を掻いていたのをやめ、僕はつい右手で上を指した。

「そう、その時は、あり得ない様な事ばかり起こるから大変だよ。」

あっ、かなっこ」

少し、顔色が戻っているかなえちゃんが、雪見母の説教を終えてこっちに来た。

「早雄くん、改めてさっきはごめんなさい」

かなえちゃんがぺこりと頭を下げた

「大丈夫だよ。あれぐらいで、怒らないよ、それに手も腫れはしなかったし」

僕は左手でかなえちゃんを撫でた。赤くは成っていたが、かなえちゃんの顔色がゆっくりと元に戻る。

「あ、そういえばなんでワームホールなの」

「なんでワームホールなの……ああ、なんで、あたしとかなっこができることがワームホールなのかだね」

「そうそうなんで、ワームホール？」

何でも有り、みたいな解釈をしていたので、ワームホールという不自然なワードを自然と受け入れていたな。

「ワームホールと言っているけど、あたしたちは虫の精霊との契約したからとか、じゃないからね」

普通にそうだろう。

「あたしの場合は、例えば」

雪見は黒板をきれいに消してから、二つの丸を離して書き、

「こつちがAでそつちがBね」

さらに左側の丸の中にはA、右側の丸にはBと書いた。

「あたしは物をこのAからBに一瞬で移動させることができるのは分かるよね」

「はい」

「ただ、物を早く動かしてAからBに移動させたら、ここに壁が在ったら、一瞬で移動させる事はできないよね」

AとBの間に壁と大きく書き、縦長に四角で囲む。

「これこそが、ワームホールと呼ばれる一番の理由で、AとBの間に見えないトンネルができて、その間をすばやく移動させる事によって、この壁に関係なく一瞬で移動させる事ができるのよ」

「だと、かなえちゃんの場合は、その壁が次元の壁になるの?」

「おお、飲み込みも早いね。その通りだよ、でも他の次元から三次元にするから、その間に三次元に変換する様になってるの」

「面白ね。でも僕の、ワームホールと関係があるの?」

「たぶん出口Cを作って」

Bと壁の間に丸を書きその中にCと書いた。

「あたしのワームホールだと、さっきみたいにこのCから出て来て、かなつこの頭に落ちたりとかして、かなつこのワームホールだと」

Aの隣に今度はDと書いて

「このDに戻らと思うのよ」

そして、雪見はAからBそしてDと矢印で結んだ。雪見はチョークを置き。

「あたしのお父さんは、ワームホールでタイムスリップをしようとしたんだけどね」

「タイムスリップ!」

「結局、お父さんは、実験中の爆発に巻き込まれて、他の次元に行ってしまった……」

雪見と雪見母は少し俯いた。

「あ、あのかなえちゃんの、ワームホールで呼び戻せないの?」

「ああ、それをやっても、かなっこのワームホールでは、ずっとここに居る事は出来ないの。でもかなっこのから呼んでもらって、話す事はできるよ。死んでないから、よしとしないと」

雪見は笑顔を作り。

「じゃあ保健室に戻るよ」

「その前に一つだけ、あの白い人形はなに」

「何それ、そんなの何処にも居ないけど?」

「あれ、次元間空間に居た、白い人形」

「知らない。後で調べておくよ。さあ帰ろう」

まっいいか。特に気にする事では無いらしいな。

僕は、またワームホールで戻るのだと思って雪見に近づき、

「なっなに、早クン急に手を握って」

「へ、ワームホールで戻るんじゃないの?」

「はー、保健室からこっちには、誰も居ないからできたけど保健室にワームホールを使って行ったら、誰か居るかもしれないでしょ」

僕はすぐに手を放し

「すみません」

とすぐに謝る。かなえちゃんがとことこ、とこっちに來て

「察しのいい早雄くんです。雪ちゃんの手を握りたいが為に、態^{わざ}とやったと、しか思えないです」

茶化しやがった。

すぐに、かなえちゃんと雪見母は科学部から出て行き。

「早クン……それは分かってやっていたの?」

「気が付きませんでした。すいません」

本気で頭を下げる。汚してしまった純白の美しい手を、

「いや別に……早クンだったら……いいよ」

今度は、雪見から手を握り廊下に出た。

しかし、タイミング悪く視界が砂嵐の様にざらつき、次元間空間に侵入してしまった。

僕は繋いでいた手をパツと離す。

そう侵入してしまったのだ。大惨事に……

放課後説明会（後書き）

そして、新たな戦いに。

読んでくれた方ありがとうございます。

また、ほかの作品も読んでくれるとうれしいです。
感想お待ちしております

二度目の戦いのはず。(前書き)

二体目です。

こんなのはさすがにきついかな？

二度目の戦いのはず。

また地面が淡く光る空間、次元間空間に

僕らは繋いでいた手をパツと離す。

「そうだ、言うのを忘れていたけれど、T H Sが出た時にしか次元間空間は出現しないから」

「鳥のT H Sを倒した時、次元間空間が崩壊するとか言っていたから、そうじゃないかと思っていた」

「今回は、どんなのかな。でもまずは、かなつこを探さないと」

ほんの少し前に出た筈の、かなえちゃんが見当たらなかった。少し移動すると

「雪ちゃん何処ですか？」

かなえちゃんの震えた声が聞こえた。

夕日が光っている地面を赤く照らしてかなり不気味である。

かなえちゃんでもなくとも、泣ぐくらい怖い。

「かなつこ！」

かなえちゃんは、雪見を見つけると飛び込んだ。

階段から上がって来た、かなえちゃんの下にはまた白い人形が。

あれは何だと、聞いたかったが今は、そんな状況じゃないな

「雪ちゃん怖かったよ。うわーん」

かなえちゃんが泣き出してしまふ。とその後ろから、火の玉がこっちに飛んで来た

「危ない」

僕はとっさに右手を出した。

消える。火の玉は触れる前小さくなり消えた。

なんで？ さっきみたいに触れてから消えるんじゃない？ ただ単に小さかっただけか。

で、その火の玉を出したと思はれる、何かがこっちに来た。

「鬼！」

二つの角を生やした真っ赤な鬼、手には僕の身長と同じぐらいの長さの、金棒を持っていた。

「まさに鬼に金棒だな。雪見、何をすればいい」

あの白い人形も気になったが、今は仕方がない、諦めよう。

「ちよつと広い所に行きたい、だけど。もう、かなつこ何時まで泣いているの、T H S が来たよ」

周りに広い教室、あった、視聴覚室。

「雪見こつちに」

雪見はかなえちゃんを起こし、木刀を出して貰っていた。

「視聴覚室か、いいね。まずそこに、入ろう」

僕らは、直ぐに視聴覚室に向かった

「でも、僕らが逃げると、あれ僕らの世界に行くんじゃない？」

「T H S は、まだ不完全です。足が透けていたので、初めはお化けだと思ったです」

「だと、今のうちになえちゃんにまた召喚もらって、倒したら？
相手不完全、なんだろ」

「それが不完全体だと、あたしたちの攻撃もくらわないのよ」

「今、火の玉を出していたけど、たぶん」

「それでも、それなりに広い所に行かないと」

僕らは視聴覚室に入り鍵を閉めて、扉に凭れかった

「はあ、はあ、鍵を閉めても、T H S が入ってくるか」

「T H S は完全体にならないとワームホールを使えないのよ。かなつこが見た時は不完全体だったけど、今は火の玉を出していたからたぶん完全体になったと思うよ」

「じゃあこんな所に入っても、T H S はすぐに追いつくよ。それにその完全体になったT H S は、直ぐに僕らの次元に行ってしまうじや」

また僕は同じことを聞く。

「それはないよ、T H S の本能か、あたしたちが次元間空間にいる

間は、ほかの次元には移らない、でも、あまりに時間が掛かったり、ダメージが大きかったりすると、あたしたちの次元に行ってしまう事もあるけど、今は大丈夫」

ガン、ガンと後ろの扉が大きく揺れる。鬼が追いついたか、しかしあの時、鍵を閉めてなかったら吹き飛ばされていたな。

「早クン、かなつこ窓側に」

走る勢いで踏み出した刹那、

「な、なんてタイミングだよ」

目の前には、金棒を振り上げた鬼が出てきた。金棒は、僕目掛けて振り下ろされ、僕は瞬間的に腕を取り

「やあああああ」

と僕と扉との少ない隙間に一本背負いを鬼にかました。全然、力を使った感覚がしない

「早クンナイス」

一本背負いで投げ飛ばした後、直ぐに雪見に手を掴まれ、黒板に近い扉にいた僕らは一瞬にして教室の後ろの方に来た。

「かなつこ、早く何か召喚して、その間にあたしは鬼の相手をするから」

「僕は」

「こつちに、火の玉とか飛んで来たら、かなつこ守って」
「了解」

鬼がゆつくりと、立ち上がっている処に、雪見が木刀で鬼に切りかかる、

「やあああ」

鬼は口から火の玉を出し木刀に当てた。器用なやつだ。

雪見は木刀に火が触れる前に放していたが、

「熱」

火には触れてしまったようだ。

「雪見、大丈夫」

「なんとか」

木刀は灰になり、鬼は金棒を振り回すが雪見はそれを上手くかわす。

後ろの方が光っていたので、見るとかなえちゃんの周りが神々しく光り、

「日本むかし話よりもたろうの桃太郎三次元変換」

リアルな、等身大の桃太郎が出てきた。

「モモちゃんゴーです」

今は火の玉を避けている雪見と、入れ替わるように鬼に突っ込んで行く、

「雪ちゃん戻ってです」

雪見がこつちにワームホールで一瞬にして戻り、突っ込んで行った、桃太郎は真剣を抜き、切りかかったが、鬼は無傷だった。

「切れないでござる」

桃太郎が喋ったにも驚いたが、本物の刀で切れない鬼には驚愕した。

鬼は笑いながら、こつちに火の玉を吐き出してくる

「消えろ」

僕は二人の前に出て両手を挙げた。火は手に当たると直ぐに消えた。

「熱」

「早クン大丈夫」

「軽く火傷しただけだから大丈夫」

ただ右手が疼く様な、変な感覚がしたのは言わなかった。

でも、この火の玉はワームホールでどっからかの次元から、持ってきた物で助かった。

最悪場合、僕が丸焦げになっていたな、しかし弱点があればいいのに、鬼の弱点と言えば……そうだ、

「豆をぶつけて見よう、だから、かなえちゃん豆を出して」

「鬼は外です、豆まきです」

「かなつこ、ここの外は何処かな」

雪見がちょっと訳の分からない事を言い出す。

ここの外は中庭かグラウンドだろ、かなえちゃんもその様に考えている様で

「とにかく、出すです。自作画豆三次元変換」

豆入りの升が、三つほど出てきた。

「鬼は外、副は内」

何声に出しているのんだ僕、やってしまった事は、仕方がないけど。

僕らの投げた豆が次々と鬼に当たる。

「おっ、くらつてる。よし、もっと投げれば」

桃太郎にも、当たっているけど、ただ目障りな感じだけ。

しかし鬼にはちゃんとからつてる、体を丸めてうずくまる、けど、何だかすごい罪悪感を覚える。

泣いた赤鬼の別バージョンみたいな。

しかしそこはTHS、鬼は豆を受けながらこちらを向き、火の球を無数に吐きだした。

「豆が燃える。火の玉はそこまで自由に使えるのかよ、もいいや、

思いっきり投げちゃえ」

「思いっきり投げたら、豆なくなっただす」

「あたしも」

あほかと突っ込みたかったが、僕もなくなり、やばいと思ったが、ちようどいいタイミングで桃太郎が切りかかった。

ならば次は、切るのもだめ、豆もだめ、でも鬼と言っても人に近かいなら、

「かなえちゃん丈を出して」

「は、ハイです。自作画丈三次元変換」

約一・三メートルの木の棒これが丈。ただの棒だが、使い方によつてはかなり強力。

「僕が突っ込む」

「「え！」」

「雪見、僕を鬼の後ろに」

「わ、分かった」

桃太郎が鬼から振り下ろされた金棒を受け止めたところに、僕は鬼の後ろから丈を右から左へ振り当てたが、鬼はびくともしない、勿論こんなもんじゃあダメージがないのは予想道理、ここから勝負、

「いけー」

僕は右足で鬼の頭を蹴る。

丈を支点にして、びくとも動かない体、そして頭に負荷を、頭を蹴って首を折ろうとしたが

「硬」

なんで梃てこの原理だぞ。そして首だぞ、普通折れるだろう。

切れないなら折ろうと思ったが無理なのか。

鬼は顔だけをこっちに向け火を吹いた。今度は火炎放射みたいなものだ。

「あっち」

右手を出して消せたのでよかったが、右手がさらにうずくというか変。

「早くン退いて」

後ろから雪見の声がして退いた。

後ろをちらつと見ると、眼に映ったのは大きな大砲。桃太郎が消え「たいほうくん発射です」

ボンと激しい音と共に、鬼が吹き飛んだ。空の彼方にキランという感じで、

「やったです」

雪見とかなえちゃんは抱き合って喜んでいたが、鬼がワームホールを使つてか、僕らの目の前に出現し、雪見とかなえちゃんに金棒を振り下ろす。

「危ない！」

僕は全力で走り丈が鬼を貫いた。まさか貫けるとは、しかし鬼は

止まらず金棒を振り下した。

僕は彼女らの間に入って

「うあ、痛って」

竹刀の時みたいにはならず、手で止めることができた。

僕は思いつきり心で、そして声を出して叫んだ

「消えろー」

鬼は、直ぐに手を金棒から離し、消えなかったが金棒は光の粉になる。

「早クン、ありがとう。しかしあの鬼しぶといね」

鬼は体に刺さった丈を抜く、刺さった部分から血ではなく、光の粉が落ちて行く。

「グオオオオオー」

鬼が耳を塞ぐほどの雄叫び。口から大量の火の玉を出した。

「僕がこれを消すからあの鬼に貫通系の攻撃をして」

「分かった。かなつこ弓と矢を」

火の玉がこつちに向かって飛んできた。

両手を前に構える

「三次元より直接転送弓」

ちよつと大きな弓と長い矢が二、三本出てきた。

僕は、次々と飛んで来る火の玉を消していく、右手の変な感覚が腕、肩、体にと伝わっていく痛いというより、だるくなる感じた。

雪見が矢を放てる状態になり。

「早クンいいよ」

僕は近くにあった火を消す。

鬼は僕らを包み込んでしまつ、でかい火の玉を口から出し

「退いていいよ」

「でも、あれじゃあ」

「大丈夫だから」

僕は退くと同時に

「いけえええ」

矢が放たれる。

何物にも阻害されない、何処までも清らかな矢が火の玉を貫く。
そして鬼の頭に矢が刺さり後ろの黒板まで引きずられる。

「今度こそ、やったです」

鬼は光の粉になるが消える前に、またさつきみたいなの、いやそれ以上の大きさの火の玉を出した。

「早くン避けなきゃ」

「いや、僕が消す」

僕は静かにしっかりと火の玉を消した。

鬼は跡形もなく消えている。
あとがた

「早くン、一度科学部へ」

僕は歩き出そうとしたが動かない、足が地に付いて無いからか、
なんで足がついて無い、目の前が床だから……

「早くン」

誰かが揺らしている。雪見か

「早くン、はや……」

後で聞いたが、僕は眠る様に気を失ったそうだ。

今、僕の秘密は明かされた、家族も僕自身も誰も知らない秘密が
明らかになった。

でも僕の体にはまだ秘密が残っているかもしれない。

二度目の戦いのはず。(後書き)

まあ、処女作なので、そこ描写が出来ていないし、伝わらない文章が多々あると思う。

皆さんから伝わりにくいという要望があれば、その部分を書き直します。

なので感想などお待ちしています

ひ・み・つ！（前書き）

かなえちゃんに振り回される回です

ひ・み・つ！

なんだ。鬼、火の玉、そして僕、燃える、変な夢……いやただの回想か。

また白い人形が落ちていた。

「だから何でこうなの」

「雪見五月蠅いわよ」

五月蠅いな。僕は目を開け

「お二人さん、早雄くんが起きたです」

ものすごいデジャヴ

「かなえちゃんここは何処」

保健室の時と同じセリフだが、見えているものは違う、たぶんどこかの家の天井、和室かな。

「雪ちゃんの家です。確か客用の寝室です」

「そう」

どたばたと、五月蠅い脚音がすると勢いよく雪見が部屋に入ってきた。

「もうなんで倒れちゃうのよ。心配したんだからね」

雪見は静かに泣きだした。僕は体を起こし、

「ごめん、心配掛けて」

右手で雪見の頭を撫でる。右手は火傷しているので少し痛い、そして感覚が鈍い

「やっと起きたわね」

あの甘い声と共に雪見母が入ってくる。

「僕、なんで倒れたのですか」

雪見母が答えてくれた。

「ワームホールの多用、まあ使いすぎでの、疲労で倒れたのよ。雪見は救急車を呼ぼうとしていたけどそんなにひどい状態じゃないから、大丈夫」

ワームホールの使い過ぎ、何で？

「ワームホールは、大きな力を持っています。たぶんですが早雄くんのは、特に大きい力だと思うです」

雪見が泣きやみ、顔を上げ、

「大きな力ほど、体への負担は大きなものになるの、それを一、二回ではなく、かなりの回数を使えば……だから無茶は、しないで」
「分かった。今後は気^{こころ}よ付ける」

と今度は、雪見とかなえちゃんが険しい顔のなり

「早雄くんは何か体に、異変は感じなかったですか。わたしの場合は、人を一度で十人ほど呼び寄せたら倒れるです。一人、一人呼び寄せたら九人ぐらいで、腕が痛くなって拳がらなくなるです。分かったです？」

「あたしは、ビル一個を移動させることができるよ。でも倒れる。分かった」

「心配をお掛けしてすみませんでした。あの、再度分かりました。体に鈍い感覚がしたら止める」

僕はちよつとビビリ気味。

あの普通の口調で、あんな強くれると、誰でもこうなるだろう
「分かれれば、それでよし」

許してくれて、よかった。

「いや、あたしたちが、T H Sと戦く前に言うべきだったんだよね、あの説明の時。ごめん」

「雪見が誤る事じゃないよ。僕が体に鈍い感覚しておかしかったのに、かつこ付けて火の玉を消したから、自業自得だから」

雪見母が両手でパンと鳴らし

「まずは、早雄君も起きたことだし、晩御飯にしましょう」

「じゃあ、僕はそろそろ」

「あなたはここに、泊まることになったから」
へ、なぜに

「早雄君のお母さんは、心配症なのかしら。さつき、あなたの携帯

に電話があつたわ。わたしが出ておいたわ。その時に、ここに泊まることを伝えておいたわよ」

「分かりました。けれど、全く着替えを持ってないですけど、ジャージは学校に置きっぱなしだし」

「学校なら目の前だよ」

雪見が右を指していた。

「そういえば、なぜ保健室じゃなくここに、学校が近いからか？ま、いいや。」

「それじゃあ、僕はジャージ取りに学校に行きます」

「あ、私も行く」

かなえちゃんがひよこひよここと手を挙げて言った。

雪見母と雪見が晩飯の用意をしてくれている間に、僕とかなえちゃんは学校に行くことになった。

「では、行つてきますです」

僕とかなえちゃんは、少し大きめの玄関を抜ける。すると目の前には我が校、佼明館の生徒昇降口が道、一本挟んで見える。もう日は沈みかけ、校舎を赤く照らす。

「ほんとに目の前。ところでかなえちゃん、今何時」

「ぼんやり暗いです。けど、七時前です。まだ自由に学校に、入れるです」

「かなえちゃんは、何か学校に忘れ物したの？」

「筆箱を忘れたです」

結構重要なものを……明日テストなのに。

徒歩数十歩で、僕とかなえちゃんは下足箱に着いた。そういえば、まだこれが貼つてあるのか

「かなえちゃん、あれに書いてある事を、聞こうとした時、何で顔を逸らしたの？」

僕は掻いていた、右手で指しながら言った。

「何のことですか？」

また顔を逸らした。何だろう？

「もしかして、あのスキャンダル記事の事ですか」

「あいつもそうだけど、かなえちゃんもなんでそこに注目するんだよ。普通、一番最初に目が付くであろう、十七不思議のことだよ」

「あいつて、誰です？彼女さんですか？」

「ただの友達……てか、何で話を逸らそうとしているの」

「いや……その……です」

煮え切らない。もしかしてワームホールと、何か関係あるのか。

「かなえちゃん、もしかしてワーム」

「しー」

かなえちゃんは、右手の人差し指を立て自分の唇にあてて、静かにのポーズをとる。

なんで急に。

隣の下足箱から、声が聞こえた。そして、隣の下足箱に居たであろう生徒が出て行き、かなえちゃんはやっと口を開く。

「関係者以外は、あれのこと聞いてはいけません。ですから、氣よ付けて話して下さい」

「ごめん」

ここは素直に謝る。しかし、十七不思議は気になる。話声は遠ざかり、

「人がいなくなったので、十七不思議について話すです。まず、十七不思議のほとんど私たちが関係してるのです」

「やっぱりそうか。じゃあ、誰もいるはずのない科学室から人の声が聞こえるとかは、さっきのあれ（瞬間移動）とか」

「そうですあの（THS）話をするときは何時もあそこ（科学部）です」

また、生徒が下足箱に来たが、かなえちゃんは、話を続ける。

さっきの、忠告はなんだったのだろうか。

「わたしたちが入学する前、そう中学三年の一月です、あの時からあれ（THS）が出始めたのです。あの頃は、まだ雪ちゃんのお母

さんがこつちに赴任する前です。なので、放課後あそこ（科学部）に行きあれ（THS）に対抗できる様に、していたのです」

「そうか、でもなんであそこ（科学部）なの？誰か来ても、おかしくない所なのに」

「あそこは、去年の三年生が卒業してから、使われてないです。後、科学部と言っても形だけで去年は一度も明けてない、とか聞いたです」

「だと、誰も来ないのは、お墨付きなんだ」

「後は、科学部に置いてある物を使って、色々面白いことが出来るからです」

勝手に使っていいのか？ かなえちゃんは、さらに言葉を付け足す。

「たとえば、塩酸に鉄を入れて、鉄に付く泡を大きな瓶に、えーと集めたんです。それに火を近づけて、ぽっんと音が出る遊びをしていたです」

「危な！ その遊びすぐに止めた方がいいな、水素は、火を近づけると爆発するんだよ」

「水素って、なんです」

「鉄に付く泡が水素だ！」

「ああ、そうですね。では今度は、早雄君も一緒にぽっんと音を鳴らそうですね」

「人の話聞いていたか！ それにさっき、ああと納得したのは、なんだったの」

「鉄に付く泡が何だか、分からなかったからです。あれ水素だったのです。分かって、すっきりです」

「それはどうも、でも、水素は爆発するから、もうその遊びはしない様に」

かなえちゃんはうんうんと、頭を縦に揺らす。

「分かったです。水素は使わないです。だと、ぽっんと音を鳴らす遊びはできます」

「もう一回言うからよく聞け！」

軽く頭に来た。何を考えているんだこの子は。

「ぽつんと、音を鳴らす遊びは危ない、塩酸で鉄を溶かしてできる泡は水素で、その水素を爆発させてるんだ。危ないから止めな」

「分かったです。では集気瓶に酸素を入れて、その中に燃えたシチールウールを入れて、線香花火を見るです」

「かなえちゃんには火を持たせたくないな」

嘆息しながら言う僕

「雪ちゃんも、そんな事を言っていたです」

たぶん、雪見も同じ気持ちだったのだろうか、いや当事者だから、もつとハラハラしていただろう。

「そついえば、瓶の爆発させてから、雪ちゃん、わたしに火を持たせてくれないです」

やっぱり、水素を大きな瓶に集めて、火を近づければ瓶も割れるよな。

「片付けるの、楽じゃなかったでしょ。掃除機は使えないだろうし」

「雪ちゃんのワームホールでお茶の子さいさいです」

「結構気軽に、ワームホール使っているね」

僕は二つの意味を込めて言った。

まだ、昇降口なのにそれに生徒が来てもおかしくないのに……

「でも、雪ちゃんすぐにポッキーを食べて、チャージしていただきます」

「チャージ？もしかして、雪見は食べれば何度でもワームホールを使えるの？」

今、かなり失礼なことを聞いたな。本人が居なくなつてよかった。

「雪ちゃんは、何でも食べればいいわけではないです。ポッキーでしか、チャージされません」

何でポッキーなんだろう？ 自己紹介の時、好物だと言っていたけど、関係あるのかな？ そついえば購買でも買っていたな。

「しかもメンズや極細です。とチャージされません」

「ノーマルオンリー！」

「そうです。あつ話がそれてしまったです。戻すです。他の関係している十七不思議は、弓道場やグランドに出てくる少女です。あれは雪ちゃんです」

ふと、目撃情報を思い出す。

身長は女子の中では高いほうで、髪を一つに結っていた

確かに雪見だ、あれは。

「もしかして、次元間空間の崩壊の時たまに、人がいない所に行けなかったとか、があるとか？」

「そうです。たまに、T H Sを倒したと同時に、空間が崩壊する事が有るんです」

「それで、グランドの真ん中に出てしまうことが有ると。じゃあ何で雪見だけなの、かなえちゃんも一緒に出てくるんじゃないの？」

「わたしは、たまたま目立たない所に出るだけです」

「そう」

なんか引つ掛かるがそういう事にしておこう。

「もう一つなんだけど、視聴覚室に出てくるお化けなんだけど、あれはT H S？」

「あれはT H Sじゃないです。私たちとは全く関係ないです。あれは昔からある七不思議です。他の十七不思議で、あたしたちが関係しているのは、巨大生物がうろついているです。あれは初めてT H Sに会った時です」

「その時のT H Sは何だったの」

「確か、巨大な馬です。普通の大きさの、五倍は有りました。でも、誰も見ていないと思っていました。ここに有ったのが驚きです」

「深夜十二時とか、そんなところ」

「いや、九時ぐらいです」

「微妙、グレーゾーンだな。ここは小山の上にある学校だけど、だれか見てても、おかしくない時間だよ、それ」

「でも、はつきりと見た人がいなかったのよかったです。はつきり見た人がいれば怪力おばさんと言う不思議がまた一つ出来ていた

です」

怪力ね……確かに。

「はつきり見た人がいれば、通報されて警察や自衛隊とか来るから」
「だからTHSはこっちで、退治しちゃいけないんですか。わたしは、雪ちゃんからこっちにTHSが長い時間いると、世界が滅亡すると言っていたです。」

「世界が滅亡する！　かなり重要なことだよ。そんな、大切な事を言わずに、説明を終わしたの！」

「忘れていたです。テヘ」

「テヘじゃないよ、かなり重要なことだよ！」

と僕が突っ込みをしてみると、音楽が流れ、校舎内にいる生徒は下校するようにと放送が流れた。

ここで話しているうちにそんなに時間がたったのか。

僕とかなえちゃんは急いで教室に行き、それぞれ必要な物を取って、すぐに学校を出た。そしてすぐに横岑家の前に来る。

やっぱり近いな。もしかしてたら昇降口から教室までと、昇降口から横岑家までを比べたら後者の方が短いかもしれない。

僕が家に入ろうとしたら、かなえちゃんがストップをかけた。

「ちよつと、待ってです。早雄くん、地下室見て見たいですか」

「地下室！　ここにあるの？」

「そうです」

かなえちゃんは、玄関の脇にしゃがみ、

「早雄くん、ちよつと下がってです」

と僕は玄関から数歩下がると、音もなく、ちょうど僕が立っていた地面が、家の方にスライドしていく。

凄いというか、何で地下室を造ったのだろうか？

開ききった地下室の入り口は、辺りがぼんやりと暗せいか、階段らしきものが数段しか見えなかった。

「こっちです」

かなえちゃんは手招きをしながら下へと行った。

僕が入ると、上の出入り口が閉まる。刹那、パツと光が付いた。僕の目の前にはかなえちゃんがいいた事が驚きだった

そこから少し階段を下る、すると

「ここが地下室です」

とかなえちゃんの大きな声と共に、映画や漫画でしか見た事が無い大きなモニターが複数ある部屋に着く。

あんなモニター、パソコンの専門店でも置いてないぞ。

そのほかでかいモニターには、学校周辺の地図が映し出されていた。

よく見ると、バツ印とクエッションマークがあつちこつちにある。

「かなえちゃん、これは何？」

僕は、地図が映っているモニターを指して聞く

「これはTHSの出現予測地点と、出現したポイントをまとめて表示している物です。バツがTHSが出た所です。はてなマークは、次に出ると思うところです」

「だと、ここは指令室みたいな所？」

「分からないです」

おいおい、さっきの説明はなんだったの

「でも、雪ちゃんならたぶん知っています」

かなえちゃんは靴を脱ぎ、ちよつと高くなっているフローリングに上がり、機械をいじり始めた。

上に行つて雪見を呼んで来るんじゃないの？

「かなえちゃん、勝手に機械いじつて大丈夫なの」

「大丈夫です。今から、雪ちゃんと通信するです」

今まで地図を表示していたモニターに、雪見の顔がドアップで映された。

「雪ちゃん」

「ん、かなつこ何してるの、地下室で、あー！　なんで早クンをここに入れてるの！早クンにはちゃんとワートに入るように決めて貰つてから、ここを教える決まりなのに……」

雪見は、今にも泣きそうな顔になっている。

「雪ちゃん、ここどんな事をする所ですか？」

かなえちゃんは、今にも泣きそうな雪見や、さっき言っていたことを無視し尋ねた。

雪見可哀そうに。

「説明したい。でも、早くンがワートに入らないと、いけないし。

早くン、面倒臭い事になる前に、ワートに入ることを承諾して。じゃないと、あたしが国のお偉いさんに……怒られるから」

国のお偉いさんに怒られる？　ワート、もしかして国家組織なの！

「いやでも……科学部の部室で雪見が言ったように、明日まで待つてほしい、明日にはワートに入るかどうか、ちゃんと決めて自分から言うから、だからそれまで待つてほしい」

モニターの向こうで雪見は溜息をついた

「分かったよ、でもワートに入らなかつたら場合、これからの早くンの生き方に大きな制限が付くことを覚えておいて」

大きな制限が付くのか……はあ、どうしてもワートに入りたいのか、いやただ規則を守っているだけか。

僕はまだ決心が付かない。世界が崩壊するとか言っていたけどまだ分からない。

確かに戦うのは怖い、もしかしたら死ぬかもしれない、でもそれが一番の理由ではない。

ただ将来が心配なのだ。

別に高校生のうちは問題がない、部活に入らなければいいだけだ。そのあと高校を卒業して大学や社会人としても心配なのだ。

何時まで戦わないといけないのか分からない。

本当の意味でなにも将来が見えてこない。

「雪ちゃんお腹が空いたです」

僕はさっきまでの考えが吹っ飛ぶ。

それより、かなえちゃんは好きな事を、好きなだけ言っている様だ。

「かなつこ、分かつてるよ。もう晩御飯の準備はできているからこ
っちに上がって来て」

「エレベーターを使つていいですか？」

「はあ、いいよ、もう……」

何か諦めたようだ。

もしかしてエレベーターもワート以外使つてはいけなないと、うん
？ よく考えれば使わないよな、普通。どうなんだろう？

大きく首をかしげた僕を、かなえちゃんは入り口付近にある、エ
レベーターらしきものに僕を強引に引っ張った。

「早くして、です」

「ちよつと待つてよ、靴、まだ履いてないから」

「靴紐なんか結んでないで、靴の踵潰すように履いてです。早くし
ないと、料理が冷めてしまうです。」

「はいはい、行きます」

出鱈目な返事をする。

「はいは、一回、行きますは、三回」

「はい。行きます、行きます、行きます」

と言いながら僕はエレベーターらしきものに乗った。

「まさか本当に、行きますを三回言うとは、思わなかったです。ち
よつと引くです」

この性格には困る。今の僕と同じように、雪見も振り回されてき
たのだろうか？ まずは反論でもしてみるか。

「かなえちゃんが言つたから、ただ実行しただけだよ」

反論をしたつもりだが反論じゃなく、ただのいい訳だ。

「何言つているのですか、早雄くんやっぱり面白い人です。じゃあ
三回、回つてにゃん、と鳴いてです」

なぜかいかにも期待してます、みたいな目で見ている。やめてく
れ。

「じゃあて、やる訳ないだろう。しかも、定番ネタにアレンジを、
加えようとしなくて」

「定番ネタ？なんです？」

すごい墓穴を掘った。やばいな

「何でもない、本当に何でもない」

「じゃあ、にゃん、の代わりに、ガオー、と言ってです」

またもや無視、これはこれで助かった。

もしかして、いやもしかしなくとも、自分が面白いと思ったことしか聞こえてないんだと思う。と言うか、何だか学校にいた時とかなえちゃんの実行が全然違う感覚がする。

「ガオー、でもやらないから、それよりエレベーター動いてる？」

「じゃあ、ワンです」

「ワンでも、やらない。それに元々のやつだよ、それ。じゃなくつて、エレベーターは動いて」

「じゃあ、何がいいんですか」

心の中では、はあでは足り無いぐらいの大きなため息をついた。

人の話ぐらい、ちゃんと最後まで聞けよ！

本当にこの人は自分の都合のいい事しか聞こえてない……ん！
そうだ。

「かなえちゃん、ここに何時までも居たら、晩御飯冷めちゃうよ」

「あつ、何でエレベーター動いてないんです。早雄くん何で言ってくれなかったのです」

さっきまで笑顔だったかなえちゃんが、

頬をフグみたいに膨らます。その表情、可愛いけど、それは逆切れだよ。

「いや、さっきから、言っていたから」

「もう料理が冷めちゃうです」

かなえちゃんはほかに料理が一番おいしいの時を、のがすとか言いながらエレベーターについてるコントローラーらしきものを操作した。

やっと上がったか。しかし、かなえちゃんは考え様には、案外扱い易いかも。

「早雄くんその手摺、掴てすじんでです」

とかなえちゃんから忠告を受ける。

僕は、フへ、とかなり間抜けな声を出した、直後、急速にエレベーターが前方方向に進む。ぜんぽうほうこう

ここで話は変わるが皆さんは慣性というのを知っているだろうか、物質はその場に止まろうとする力の事である。

電車や車に乗っている時に急ブレーキをかけられたら、今まで進んでいた方に引っ張られたり、よろけたりした事はないだろうか、これも慣性によって起きる現象、物質はその場に止まろうとする力によっておきる現象だ。

ここまでくれば気が付く人も多いと思う。

僕は、軽く手摺を握っているだけなので、慣性因って思いつきり後ろに引っ張られる、すると手摺から手は外れ後ろの壁に激突する。なので。

「がつ、いてっえ」

とさつき言ったように、後ろの壁に激突する。もちろんかなり痛い。

「大丈夫ですか？」

「うん、多分。」

尋常じゃないほど痛いがないにしないにしない。

それより気になるのが、このエレベーターが前に進む現象。

「なんでエレベーターが前に進んでるの？」

「出口が分かれば、分かります」

チーン、と音が鳴り目の前の扉が開くと同時に、かなえちゃんはすぐに降りてどっか行った。

何処、ここ？庭、ぽっいけど。

「早雄くんこっちです。この勝手口から入るです」

とかなえちゃんが家の前で手招きをしていた。

だここは、横岑家の裏庭！ 広い、もう一軒ぐらい建ちそう、でもそんなことに感動してないで早く行かなくては、

僕はかなえちゃんに付いて行き勝手口から入った、その後僕は扉を閉める前にエレベーターがあつた所を見るが、そこには何もなかった。

何も驚くことはないか、あの特殊なエレベーターならあり得ると思う。

と不意に、声を掛けられた。

そこには・・・

ひ・み・つ！（後書き）

処女作題のほんのちょっと手直し版どうでしょうか？

まだまだの文章でありますが感想をお待ちしてをります

彼女達の秘密（前書き）

かなえちゃん秘密だったり。
雪見の趣味だったり。

誰かさんがへんたいだったり。
ラッキースケベだったり。

まあそんな話です

彼女達の秘密

ブロン姿の雪見がそこにいた、結構、いやかなり似合っていて、見とれてしまった。

「……ただいま」

じつと雪見を見詰めてしまい、おかしい空気になり掛けたが、
「ただいまです。雪ちゃん今日の晩御飯はなんです」

とすぐになえちゃんが言った。空気を読んで言ったかな……いやたぶん違うな。

「今晚の晩御飯はシチューだよ」

片手にお玉を持って言う雪見。

「もしかして、何時ものですか、白くてドロドロしたやつですか」

「白くてドロドロは余計、でも、そう何時ものあれ」

白くてドロドロしたやつ、客観的に見ればそうだけど……そっちょり、何時ものとは何だろう気になる。

僕はかなえちゃんと、共に玄関に靴を置きに行き、ダイニングに向かう。

「早雄君、かなえちゃん、お帰りなさい」

ダイニングで待っていたのは雪見の母だった。

雪見母に、こつちよと誘導され座ったら、昼とは逆で今度は右になえちゃん、左に雪見が座った。

雪見が掛け声を掛け

「では、いただきます」

「……いいいただきます」

まずは、雪見が言っていたシチューを一口。

「おいしい」

その言葉が口からこぼれ落ちる。

「雪ちゃん、今日もおいしいです。最高です」

「おいしい、雪見、本当に上手くなったわよ。」

かなえちゃんと雪見母は、この上なく幸せそうな顔をしていた。

たぶん、毎日の様に食べているかなえちゃんたちでも、こんな幸せそうな顔をしてるのだ、初めて食べた僕の顔は緩みぱっなしだろう。

「もう、ほめすぎだよ」

雪見は、赤くした頬を隠すように両手をあて、くねくねしている。

本当においしいシチューを今、全部食べてしまうのでは勿体無いと思い、主食を見るとチャーハンが載っている。

なんで？　　というか何で食べればいいのか、スプーンはシチューに使ったからパス、ならばあとは箸？

とか僕が悩んでいたが、僕以外の三人は何の躊躇い（ためらい）もなく、シチューで使ったスプーンを、チャーハンでも使っていた。僕も真似して、シチューで使ったスプーンでチャーハンを掬い上げる。

「うまい」

今度は口が勝手に動くように言葉が漏れる。

しかし本当にうまい、おいしいとうまい、の違いはなんだ、と聞かれても答えられないが、このチャーハンはうまい、ただその一言でしか、表わす必要がないほどうまい。シチューはおいしい、そしてチャーハンうまい。

などと思いつつ、次々とチャーハンを口の中に入れていく。

「早クン、そんなに褒めないでよ、恥ずかしいじゃない」
バンバン背中をたたかれる。

痛い。照れ隠しとか、そんなレベルでは無いような感じだな、これは。

「男の人に食べてもらうのなんて初めてなのだから、もうそんなに」
「何か言いながら、食べてた？」

僕は半ば強引に雪見の話を切る。

「うまいって言った後です、」しかし本当にうまい、おいしいとうまい、の違いはなんだ、と聞かれても答えられないがこのチャーハンはうまい」

「皆まで言わなくていい」

声真似に力を入れて話していたかなえちゃんを止め、箸を持ちサラダとみそ汁を飲む。

と、ここでやっとなは僕は気が付く

「もしかして、和洋中すべて揃ってる」

「そうだよ。シチューの時は何時もこれ」

と、くねくねしていた雪見が答えた。

「しかし、スプーン一つでシチューとチャーハンを食べると……なんか凄い」

「今、流行りのエコです。スプーン一個分の節水です」

「それは違うわよ、かなえちゃん。私が昔から、この食べ方をしていたのよ」

雪見母はそのあと、でもそう言われればそうだね、とか言ってるのを聞きながら、食事を終えた。

食後、僕は食器を片づけお茶を飲んでいたのだ、が二名ほどお茶とお菓子を食べている。

雪見とかなえちゃん、それぞれポッキーとトッポをポキポキ食べていた。

テレビは置いてあるが付けず、お茶を啜る（すする）音とポキポキ、音がするだけまずどこから尋ねる幕だろうか……ポッキーとトッポの箱詰めが何段もあった事か、それともこの状況か、二つの事を考えていたが前者でも後者でもない第三の話を、かなえちゃんが始めた。

「あつ早雄くん、わたしはトッポでチャージです」

とこんな感じで唐突に、

「急にどうしたの」

「あのあれの続きです。雪ちゃんはポッキーですが、わたしはトッポです」

「ワームホールのチャージの話？」

「そうです」

「かなつこ、そんな事を喋ったの！」

「ほかに、ワートが十七不思議に関係しているや、初めてT H Sが出た時の話や、そんな話を聞いたな」

「かなつこ、機密事項を守りなさい」

機密事項と言うともしかして

「早クンワートに入ってください」

いや、もしかしなかった。

雪見が僕の腕にすりつきながら、お願いされた。

「そうしてくれないと、あたし国のお偉いさんに……」

またそれが、怒られるとか何とか、

「そういえば、世界の崩壊の話もしたです」

「確かに、何でもこんな重要な事を話さなかったの？」

かなえちゃんがさりと云ったあと、雪見は驚愕して僕の言葉も届いていない感じた。

だって、目の前にはワートに入る承諾書と朱肉がある。

突然目の前に出てきたので多少は驚いた。

夕食と同じように座っていたので、雪見は僕の左手を横から取り朱肉へと近づけ、おもいつき僕の指を朱肉に押し込み、血で染めた様に赤くなった指を

「て、駄目じゃん」

僕はすぐに手を引っ込める

「何で、本人の意思を無視して、ワートに入った事にしようとするの！」

「だって、最大級機密事項が一般の高校生にばれたんだよ」

「世界の崩壊が最大級機密事項だって。初めに言わなければいけない、様な事じゃないの？」

「それを説明しなかったのは、あくまでもT H Sが危ないとか認識してもらえばいいの。あの場合、次元間空間と、T H Sそしてワームホールとワートの事を知るだけでいいの、他の情報を与えたりとかすると、不安になって他の人に言ってしまう事も有るから」

成程。

「でも……本当に待つてほしい……一人で考えたいんだ」
「……」

僕はそっと立ち上がる。

「ごちそうさまでした」

そして部屋にこもる。

時間はただ過ぎる、明日のテストに向けて勉強しなければなら
ないがする気が起きない。

雪見に言われた、ワートの入ってください。と……

かなえちゃんが言った、世界の崩壊、しかし世界が崩壊するとか
言われても、何だかはつきりと分らない普通そうだろ、あの状況
から世界が崩壊する。

あのTHSがこつちに來て世界の混乱を招かない様にしてるだけ、
だと思っていた。

たぶん地球滅亡とか言わなかったのは、地球だけでなくこの次元そ
の物が消えるのだろう。

でも、自分がいなくともやって行くとと思う。今までも雪見とかなえ
ちゃんの二人でやってきてのだから、僕がいなくたっていいと思
う……僕は何をしたいのだろう、ワートにい入ってもいいと思けど。
将来の事もある……ワートが国家機関でも、給料が出てもそれでも
だ。僕がワートに入らないと言っても、あの次元間空間に自動的に
入ってしまう……如何したらいいのだろう、やはりワートに入らな
ければいけないのだろうか、世界を守るため……

悶々と考えているとコンコンとドアがノックされた。

「入るわね。早雄君お風呂が沸いたわ。今はかなえちゃんが入っ
てるわ、だから次入ってね。それじゃ」

と言い雪見母は部屋を出た。ワートに入るかどうかは聞かなかった
な。

僕はジャージを……何処だ、何処行つたジャージ、ましてやジャ―

ジの入った袋も無い、もしかして、地下室に置いて来たか如何しよう、かなえちゃんは風呂だし、雪見に頼むか。

僕は雪見母に雪見の部屋を聞き、二階のある部屋を尋ねた。

「雪見入るよ」

「……はい」

雪見の部屋を、一目見て言える事はオタクの部屋だ。

ライトノベルや漫画同人誌らしきものである。

僕もその方面には少し詳しいつもりだが、ここまで染まっていはいない。

僕が本の多さに圧倒されていると、机に向かって座っている雪見のが、どうしたのと声を掛けてきた。

「本すごいね」

「これら私のコレクション。まあ本だけで無いよ。DVDとかもあるよ」

と、一冊の本とDVDを出した両方とも人気、萌え漫画とアニメだった。

「雪見はオタクなの」

率直に聞く

「そうだね。その通り、あたしはオタクだよ。それよりこれ知ってる」

さつき出した漫画とDVDを僕に見せた。

「知ってる、らきすと、涼　ハルヒの憂鬱だな」

「そうそう、あたしこれらが好きでさ、結構色々あるんだよ」

雪見は僕を机の間の椅子に座らせると、パソコンを操作し始めた。「かなり高そうなパソコンだけどこれいくらしたの」

雪見が操作しているパソコンは見た感じ、ハイスペックパソコン。簡単に説明するとパソコンの機能が高い所為で、ソフトが何にも入って無いのに50万とかするパソコン。

「ほとんどタダ、懸賞であつた。おっ、やっと出てきた。」
パソコンのモニターには萌え画像が出てきた。

「結構あるね」

「ほんの一部だけど」

あのキャラが好きだの言っていると。

「ごめんね……」

急に雪見が謝り出した。ましてや目から流れた雫は頬を濡らしていた。

「ごめんね……早くクンの意思を無視して、無理やりワートワートに入れようとして……」

「いや、僕が早く決断しないといけないのに、無理して待ってもらっているのだから……だから……泣かないで」

「でも明日までには、ワートに入るか答えてくれるのに。あたしが明日まで待つと言ったのに……ごめんね……ごめんね」

雪見は、僕にすがりつき、何度も謝る。

「いや、秘密にしなければいけないことが、まだ（・・・）一般の高校生である、僕にばれたなら、無理矢理でも入れた方がいいと僕も思うよ」

だから泣かないで。

僕の思っていたことが伝わったように、雪見は泣きやみ、輝きのあつたいつもの顔に戻っていた。

「まだ！今、まだって言ったよね」

さらに雪見の目が輝く。

「だと、入ってくれるの。ワートに入ってくれるの！」

「あ……うん」

でも、まだ迷いはあった。何か心に引っかかる状態。曖昧な返事。

「ありがとう」

雪見は僕の右手を両手で取り、何度もありがとう、ありがとうと言った。

ちよつと嬉しいかも。

「今直ぐに契約と行きたいけど、あの紙お母さんだ捨てちゃったし。じゃあ、あたしも明日まで待つと言ってから、明日の放課後に契約

をしてもらおうようにするよ」

今直ぐは無理だと分かった時、ほっとした。やっぱり心は誤魔化せないか。

「それで、ジャージを地下室に置いてきたから、取り行つて貰いたいなと思つてさ」

「じゃあ、取り入つてくるよ。パソコンの電源落としてくれる」

「分かった。パソコンの電源を切つておく。あつ後……トイレは何処」

「トイレは階段の下だよ、じゃあ」

と言い雪見は部屋を出て、僕もパソコンの電源を切り、部屋を出る。トイレは階段の下だな、あつた。

僕はドアを開ける

「へ……」

「……」

と何故か着替え中のかなえちゃんがいた。

「キヤーー」

「すみませんでした」

僕はすぐにドアを閉める。

まさか脱衣所だと思つてなかった。隣に全く同じ扉があるとはバンバンとかなり五月蠅い音、まるで拳銃を撃っているような、ましてやドアにはそれまた拳銃で撃つたような小さな穴、まさか。

目の前の扉が勢いよく開き、パジャマ姿で拳銃を構えている、かなえちゃんが出てきた。

「死ね――――――――――」

語尾にいつも、ですを、付けているのに今付いていなかった。かなりヤバイ、たぶんかなえちゃんは僕を万死にしても、物足りない勢いだ。

かなえちゃんは引金を引く僕はつと差に目を閉じてしまった。バン

目を開けると、雪見母がかなえちゃんの手を取り、うまく僕に当

たらないようにしてくれたが、耳にかすれた。

「かなえちゃん、何やっているの」

僕は足の力が抜け立てなくなる。

腰が抜けた、普通拳銃をかなえられた時なるけどとにかく怖かった。
「早クン何があったの」

僕のジャージが入った袋を持った雪見が駆け寄ってきた

「トイレと間違えて脱衣所を入ってしまったて、かなえちゃんが着替え中で、それで怒らしまつて……拳銃で撃たれた」

「大丈夫なの、怪我不い？」

「大丈夫……直ぐに雪見のお母さんが来てくれたから」

かなえちゃんは雪見母から拳銃を取られ、泣いたしまった。と思っていたらどうしたものか泣くのを止め、顔を少し上げ一点を見つめる。

「どうしたの、かなえちゃん」

声をかけても顔の前で手を降つても何の反応もしない。

「はあ、やつちゃった。早クン、朝は勝手に人の過去を詮索しない、その人の過去が知りたいなら本人に聞くようにと言ったけど、これは言わないとね」

「そんなに大変な過去が」

「そうね。3か月前の実験中に吹き飛んだ話覚えてるよね」

「ああ、ワームホールの実験のやつ」

「あたしのお父さんが居なくなつたというより、次元間をさ迷つてと行つたのは、覚えているよね。あの実験の時になつこの両親も居なくなつたの」

「でも、雪見のお父さんと一緒に次元間をさ迷ってるんじゃないの？」

雪見は大きく顔を横に振る。

「何処にもいな」

「まさか、死んだとか」

かなえちゃんが何か反応したように見えたが、気のせいかな？

「分からない、死んでても、おかしくはないけど、何も遺体らしき物や人が死んだ痕跡がないの。どこにも。だから分からない」

「雪見より辛いと」

「そう。かなつこは親がこの世界から最初からいなかった事にされたと思ってるのよ。実験の後、かなつこは、おかしくなったの。語尾に、ですをつけるようになって、強いストレスを感じると暴れ出したり、今みたいに黙り込んだり、ましてや、あんな子供っぽくなかったよ」

「今と真逆の性格だったのか」

「色々あつて、医者に見せ行っただけど、何があつても元に戻らないと、言っていた。そう……たとえば、かなつこの両親が戻ってきても……他にも細かいことが複雑に絡まっているけど、ほとんどがワートに関わる事だから今は機密に関わるから言えない」

僕はかなえちゃんがここまで変わってしまった訳を、ちゃんと知り僕に何が出来なのか探し見つけたい。

これはたとえワートの事を知らなくとも、そう思っただろう

僕らは、かなえちゃんを彼女の自室に入れ、僕は風呂に入った。

「はあ、複雑だよ。ただでさえ、おかしい事ばかり起こっているのに、ワームホールやTHSそれだけでも面倒なのに、世界の滅亡……秘密にしなければいけない事の多さ、そして精神が不安定のかねえちゃん……本当に複雑だな。全部三か月前、実験室が吹き飛んでからか……」

確か、あの実験をした大学は、ここからもそう遠くない人里離れた所にある国立大学。

実験中に実験室を吹き飛ばすほどの爆破、そしてスタッフ三人が行方不明。

その三人は雪見のお父さんとかねえちゃんの両親。それ以外、死傷者はいない。

確かテレビのニュースだと消防や警察の態様が早すぎると言っていた、まるでそこで爆発が起こるのを知っていたように。

その所為か、何処のメディアでも何故爆発したのか分からないそう
だ。

たぶん、ワームホールがメディアにばれない様にしたのだろう。国
の混乱を招かない様に。

何だか逆上してきた。黙々とよく考えていたな。

僕は自分に感心しながら風呂を上り、着替えていると急にドアが
開いた。

「きゃ」

雪見は叫び、すぐにドアを閉める。

またか！

「ごめんね。居るとは思わなくて」

「普通こんな長い間風呂に入らないよね。誰も入っていないと思う
のは普通だな」

お湯に最低でも二十分は浸かっていたからな。三十分は入ってい
たか？

「でも、何で脱衣所とトイレのドア全く同じなの？」

「ドアが足りないからって、同じ物になったの」

「トイレの用のドアと一緒にだの中に人がいるか分からないね」

これは冗談抜き、本気でそう思う。これが、色々な元凶になってい
るからな。

「この家に地下室を作る時に、ちょっと壁とか壊してドアを間違え
てね。どうせ女子しか、居ないしという事でそのまま」

何で客用の寝室があるのに、このままなのかな？

「入っていいよ」

着替え終った僕と、入れ替わり雪見が入って来る。

「じゃあ次あたしが御風呂入るから」

「お休み」

「もう寝るの？　じゃあお休み」

僕は寝室に戻り眠りに付いたが……

彼女達の秘密（後書き）

かなえちゃんが高スペック人間だったり。

雪見がオタクだったり。

早雄がラッキースケベだったりしました。

前描きどおりでしたよね？

ずいぶん前に書いた作品、と言っても二年前何ですけど。

ここまで読んでくださいますありがとうございます。

些細なことでもいいので、この章を読み終わっての感想をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1418z/>

ワームホールっていきなり言われても……

2011年12月16日18時46分発行